

## はじめに

田口善久

戦争である。私たちがグローバル社会に住んでいるというかぎりにおいて戦時中である。いや、これまでもいつもそうだったのかもしれないのだが、今強くそう感じる。新型コロナウイルスの蔓延という事象を経て、海の向こうから吹いてくる風によって人生がかくも容易に変化するものと痛感させられてきたからであろう。ヨーロッパで起こった戦役は、その震源からはるか遠いアジアにも不気味な余震を引き起こしつつある。この間、私たち、ユーラシア言語文化論講座の面々も、ロシア・中国のフィールドへのアクセスについて、あるいは断念せざるを得ない状況に追い込まれ、あるいはこれまでにない困難を経験してきている。

今年度は、講座にとっても激動の年になった。2年にわたり療養中であられた菅野憲司教授が11月に逝去されたのである。菅野教授は、外傷からの回復に努めて来られたが、新たに病を得て帰らぬ人となった。心よりご冥福をお祈りするものである。また、日本・ユーラシア文化コースにおける文化研究の重鎮として、さらに会議におけるご意見番として皆に頼られてきた吉田睦教授が今年度いっぱいまで退職される。本講座はこれで二人の教授を失い、来年度から残された二人の教員の体制となる。そのような中、本言語文化論集25号を世に問う。

本号は、「吉田睦教授退職記念号」と銘打つ。人類学者として、シベリア研究の第一人者として研究を進められ、また学部学生及び大学院生の指導に当たってこられた吉田教授のご退職を祝い、記念するものである。吉田教授の研究歴・研究業績については、本号に掲載の略歴・著作目録をご覧ください。吉田教授は、研究対象となる人類集団が居住する地域を自分の足で歩いてデータを収集するフィールドワーカーであり、物の客観的性質を熟知したうえで人間とのかかわりを体系的に記述し説明する文化人類学者である。筆者としては、その学識に対して深い敬意を感じたこともさることながら、それよりも、極寒のシベリアにおけるトナカイ橇による移動の話や、現地入りのヘリを待つ話など、とてもじゃないがまねができない現地調査の話を驚嘆しつつ聞いたことが思い出深い。本号には、吉田教授その研究活動について自ら語られた回想録が巻頭に置かれている。教師としては、学生の学業環境づくりに大変熱心に取り組みされてこられていて、これもまたまねのできないレベルの仕事ぶりであった。学生に吉田教授ファンが多かったとしても不思議ではない。

吉田教授の回想録の後に、学生の代表としてソロンガさんがエッセイを寄せてくれている。また、吉田教授は、外務省に長らく勤務されたことで実務に明るく、事務的業務もまたお手のものであった。個人的には、幾度となく彼の的確なアドバイスに助けられたことを感謝したい。同僚として、学問研究・教育の外においても、実に頼りになる存在であった。

以下では講座の教員たちの本年の活動状況を、各自に語っていただくことにする。

\*                     \*                     \*                     \*

吉田は最終年度ということで特に何もしない、できないという身構えで大体その通りになっていますが、北極域研究加速プロジェクト（ARcS II）の一角に参画している関係で、JCAR（北極域環境研究コンソーシアム）の新規長期構想編纂プログラムによる出版物（『北極域の研究－その現状と将来構想』（ISBN9784303562304））；2024年3月海文堂より出版予定）の執筆を依頼され、その数か所を記述しました（表紙カバーに私のネネツ牧民の写真が採用されています）。その中では北極域のユーラシア側の民族学、文化人類学関係の先行研究をまとめた部分が若手研究者に有用かもしれません。また共同編集者として（もう一人は北大の服部倫崇教授）数年前より計画してきた『ロシア極東シベリアを知るために70章』ですが、ようやく出版の見通しが出たところです。これは退職に間に合いそうもないのが残念です。

田口は、ここ3年で初めて国外での国際学会となる The 26th Himalayan Languages Symposium で発表しました（9月）。Saint Germain des Prés 近辺にアパートを借りて短いパリ生活を楽しみました。また、リモート参加ではありましたが、ハノイで行われたワークショップ Cross-disciplinary Studies in East and Southeast Asian Historical Linguistics で発表しました（6月）。それ以外の動静としては、長年理事をしてきた日本歴史言語学会の会長になりました（12月）。任期は2024年から2年間になります。

周は、2019年に申請した科学研究は今年度で最終年度となる中、中国で3回の調査を行い、計三週間の滞在をしました。広東省、江蘇省、上海市などで複数の家族にインタビュー調査などを行い、ポストコロナにおける中国社会の変化について情報をアップデートしてきました。調査を通して感じたのは、ここ数年における激動中国の凄まじさです。これまでの認知を覆し、研究の視点を練り直さないといけないと感じています。12月には国際学会 ISSCO バンコク大会に出かけ、「Factors Influencing Chinese Families on the Decision Making of Study Abroad: Social Class, Cultural Capital and Educational Strategy」と題して発表を行い、また王維亭氏と共同で「中国における職業教育に関する調査研究—上海市 K 中等職業学校の分析を通じて」を執筆し、千葉大学国際教養学部紀要第8号に載せる予定です。

児玉はこれまで取り組んできた故赤木祥彦福岡教育大学名誉教授の乾燥地・沙漠調査資料を『アフロ＝ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 18 赤木祥彦博士沙漠研究コレクション』（2023年）として刊行することができました。自身の科研（C）「中国社会主義体制下モンゴル牧畜民女性の都市化過程における社会進出と生活経験」（17K03274）は2023度が最終年度です。これまで公開した都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリーをモンゴル語と日本語で公開する準備を進めています。そのために、共同研究者で研究協力者であるサランゲレル中央民族大学教授を千葉大学外国人研究者として招聘予定です。また、内モンゴル大学教授のオルトナスト先生が2023年4月より千葉大学外国人研究者として来日されています。オルトナスト先生はユーラシア言語文化論講座で学位を取得した修了生です。中国農業科学院草原研究所研究員の韓文軍先生を2023年12月から千葉大学外国人研究者として受け入れています。約1ヶ月半滞在予定です。ようやく中国との研究交流が再開しました。

最後に学生の動向です。大学院博士後期課程では、2022年度に廣田千恵子さんが「モンゴル国カザフ人の装飾文化動態—移民・少数民族の文化継承と変容に関する考察—」により博士号を取得しました。現在、北海道大学スラブ研究センターで日本学術振興会の特別研究員PDをしています。博士後期課程には、唐さん、ウニバトさん、スルナさん、藤田依久さんの4名が所属して研究を続けています。博士前期課程では孟根特力（ムンゲンタオリ）と王文芳さんが修了しました。現在、楊芳芳さんが所属しています。学部生では、10名の学生が卒論を執筆し卒業しました。

\* \* \* \*

この3年で私たちは多くのことを失った。絶望している暇はないことはわかっている。前に歩くしかやることはないのも理解している。ただ、同じではない。何か新しい平衡感覚のようなものを身につけなければならないのだと思う。多くのことが従前空気のごとく有していた安定性を失い、私たちがこれから向かう先は怪しく揺れ動いている。

2023年12月某日